



第 8 回

五輪を制した「一人時間差」

森田 淳悟

morita jyungo

女子バレーボールが金メダルを獲得し、「東洋の魔女」として一斉を風靡した1964年の東京オリンピック競技大会。男子バレーボールも銅メダルを獲得していたというのに、メダリストの祝賀パーティーに呼ばれることはなかったという。

その悔しさを屈辱として受け止め、バネにしていこうと、全日本男子チームの強化を引き受けたのが松平康隆監督だった。1966年の世界選手権（チェコスロバキア）に向けてのメンバー選考で、その松平監督に、背番号12の選手として初選出されたのが、当時、日本体育大学1年生の森田淳悟さんだ。“一人時間差”の生みの親としても知られる森田さんに、当時の松平ジャパン、一人時間差にまつわる秘話、ミュンヘンオリンピック金メダルへの道、今後のバレー界の展望などについてお話を伺った。

聞き手／西田善夫 文／山本尚子 構成・写真／フォート・キシモト

## バレーボールはつかめない

— ロンドンオリンピックで女子バレーが28年ぶりに銅メダルを獲得しましたね。

僕は現地で観戦していましたが、あれは本当に値千金でしたね。金メダルに等しい頑張りや、選手たちは見せてくれました。一步間違えれば、準々決勝の中国戦でひっくり返されて敗れていたかもしれないのですから。

— そう考えると、バレーボールに「絶対」はないですね。

バレーはボールをつかむことができないのでね。持って止めることができませんから、そこが難しいのです。ネットをはさみ対峙してジャンプするときも、相手のタイミングと自分の動きを合わせなければいけません。

— そうか、「打った」「拾った」はあるけれども、「捕った」はありませんからね。そこがバレーの難しさですね。

## バレーは高校に入学してから

— 私の記憶では、森田さんの身長は194センチだったかと。

はい、そのとおりです。中学に入るときに162



小学6年(1959)



日大鶴ヶ丘高校時代(左から3番目)(1963-1965)

センチ、高校入学のときには187センチありました。なんでも江戸末期生まれの曾祖父が6尺(約180センチ)あったそうだから、隔世遺伝ですね。たぶん僕の孫あたりがまた大きくなると思います。

— バレーを始めたのは、高校になってからだそうですね。中学時代は何を？

野球の選手になりたいと思った時期があって、中学では野球部に入りました。2年生のときに陸上部をつくり、ハイジャンプもしていました。高校進学に際してはどこか大学の附属高校がいいと考え、真面目に受験勉強をして日本大学鶴ヶ丘高校に入学しました。

— その学校がバレーの名門だったというわけではなかったのですか。

高校に入学したら何かスポーツはやりたいと思ってはいましたが、具体的には何も知りませんでした。面接のときにバレー部の先輩が来て、顧問の原田智先生のところに連れて行かれました。「おまえはデカイからバレーボールをやれ。俺がちゃんと教えてやる」と言われ、入学と同時にバレー部に籍を置くことになりました。

## 高校の恩師のすすめで 日体大へ

### — 日本大学ではなく、日本体育大学に進学されたのは？

恩師の原田先生が日体大卒業だったのです。いろいろな大学から勧誘は来ていましたが、原田先生にお任せして「日体大に行け」ということになりました。



大学2年で選ばれたユニバー東京大会で優勝(左から4番目)(1967)

### — 全日本入りしたのは大学1年生のときですか。

はい、1966年8月にチェコで開催された世界選手権のメンバーに選ばれました。それより前、高校3年の2月にも、合宿へは参加していました。やったことのないトレーニングの連続でもうきつてきつて。周りを見れば東京オリンピックの銅メダリスト、森山(輝久)さん、徳富(斌)さん、池田(尚弘)さん、南(将之)さんなどすごい人たちばかり。でも当時、実は南さんのような有名選手を僕は全然知らなかったのです。

### — 初めての世界選手権は勉強になりましたか。

なりましたね。当時、ソ連、東ドイツ、ブルガリアなどの選手たちは、筋骨隆々で体格が全く違う。ブロックでは腕だけじゃなく、腋(わき)の下から上全部がネット上に出ているんですよ。スパイクでも、日本は196センチの南さんですら足長のスパイクを打っているのに、ソ連はゴムまりのように真上からパカーンと打ち下ろしてくる。試合に出させられたらどうしようと思って、ベンチで一生懸命「頑張れ、頑張れ」と応援していました。

## メキシコオリンピックでは 一段上がって銀メダル

### — それが世界への第一歩だったのですね。大学3年生で出場した1968年のメキシコオリンピックで、日本は銀メダルを獲得しましたが、チームはどんな様子でしたか。

みんな「金メダルを取りたいな」という気持ちは持っていたのですが、どことなく「願望」は「願望」で終わったというような部分があつての銀メダルでした。

### — 「何が何でも絶対取るんだ!」という思いが若干弱かったと。でも、社会主義国家の強豪国が居並ぶ中で、銀メダルはすごいですよね。

そうですね。女子は東京オリンピック以来、日本対ソ連の図式が長く続いていましたが、男子は日本対共産圏諸国という勢力争いがありました。メキシコでもミュンヘンでもその流れは続いていました。当時の社会主義国は大変な強化をしていましたよ。

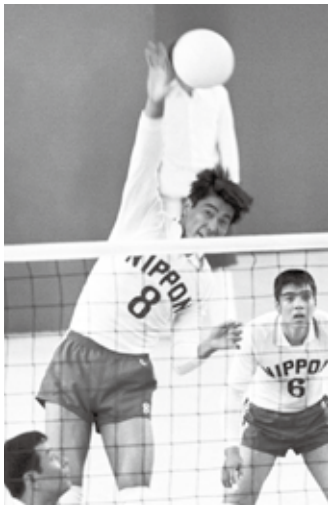


メキシコオリンピック、銀メダル表彰式(1968)

### — 審判も社会主義国家出身の審判が多かったですよね。東京オリンピックで金メダルを取った「東洋の魔女」の大松博文監督に、突撃インタビューをしたことがあります。そのとき、「7対3の力があれば勝てると思っていた」とおっしゃっていました。5対5ではなくて。それは、審判も西側諸国より社会主義国家の人たちが多いため、そのことに対する大松さんらしい一種の対抗心から出た言葉なのだと、後からわかりました。

## 「一人時間差」の誕生

— 森田さんといえばあの圧巻の「ドライブサーブ」と、「一人時間差」が思い浮かびます。でも初めて一人時間差を見たとき、失礼ながら「あー、森田選手がけつまずいた」と思ったものでした。



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)

あれは、メキシコ大会で銀に終わって、ミュンヘンへ向けての1回目の合宿に入ろうというときでした。松平さんが全員を集めて、「今までの全日本のバレーは、テクニク的にも戦術的にも、9人制の流れになっていた。だからミュンヘンに向けては、これぞ“This is 6人制”といえる技術を考えよう」と言われたのです。どんなささいなことでも、くだらなくともいいから考えると。

— それですずっと考えていたのですか。

直接のきっかけは、大学3年の終わりごろ、練習でクイックを失敗したときに、ヒントを得ました。日体大ではワンマンチームでしたから、10本中10本僕が打つといった状態で、なんとかブロックを分散させる方法はないかいつも考えていたのです。そんなとき、僕がAクイック（セッターのすぐ手前にジャンプして入り、速く低く上げられたトスを打つ）のタイミングで入ったら、セッターは1メートルほどの少し高めトスを上げてしまいました。浮いているボールを返さないと監督に叱られます。ですから一度踏み切ったあと、ひざを曲げたまま少し待つかたちになりました。そこからスタンディングジャンプで伸び上がってボンと打ったら、目の前のブロックはもうなかったのです。セッターがあやまる横で、ブロッカーは「あれ？」という顔をしていました。

— フェイントの効果を生んだのですね。

そうです。「今の面白い、もう1回やってみようよ」となっ

て、セッターには「今のトスをもう一度上げてくれたら、俺が突っ込んで合わせるから」と。それでまたノーマークで打てたわけです。Aクイックに見せかける以外に、次に試したのがサイドステップでした。沈み込んでから右に1歩出ると、左に1歩出る。それからCクイック（Aクイックの裏返し。セッターのすぐ後ろにジャンプして入り、速く低いバックトスを打つ）に見せかけるもの。Bクイック（Aクイックよりも2メートルほど長めで、ネットに平行で速いトスを打つ）に見せかけるもの。わずか20分ほどで5つのバリエーションができました。

## 隠し事の嫌いな松平監督が「いいと言うまで絶対使うな」

— 全日本の合宿でそれを披露したときはどうでしたか。

一人時間差というのは、ブロックがついて初めて様になるのです。一人でやったらただのモンキーダンスですよ。松平さんが見て、「おまえ、何やってるんだ？」と不思議そうに聞かれます。「クイックに入って、でも打たないで、時間差のトスを打つプレーです」と説明しましたが、やはりあまりわかってもらえません。そこでブロックをつけてもらい、猫さん（セッターの猫田勝敏選手）に耳打ちして、「後頭部に高さ1メートル、幅1メートルのトスをください」と頼みました。今のセッターは「ここにくれ」と言っても、非常にアバウトですが、猫さんはドンピシャでそこにくれます。Aクイックの位置に入り、打たずにサイドステップして猫さんの後ろに回り込み、ボンと打ちました。



合宿風景 (1971)

— **ブロックはAクイックに合わせて飛んでいますから、ノーマークになるのですね。**

そうです。松平さんは、「おまえ、すごいのがあったね」と感心していました。5種類全部を打ち終わったら、松平さんが「もういい、森田、俺が使えというまでそれは絶対使うなよ」と。松平さんは本来、生活でも技術面でも隠すことの嫌いな方でした。日本はコンビネーション・バレーですよね。常々、「コンビネーションはどんどん見せろ。出せば出すほど、敵チームは考えすぎて混乱するから」と話しておられました。でも、一人時間差だけは「見せるなよ」と言いました。だからできたのは69年秋でしたが、国際試合で初めて使ったのは70年8月、ブルガリアでの世界選手権でした。

## おにぎりの差し入れ

— **1年経って、ついに解禁になったのですね。**

予選から使い始めて、ほぼ百発百中でした。当時はほとんど口頭で合図していたのですが、繰り返すと相手に分かってしまうので、サインをどうしようかと相談しました。ブルガリアの観衆は床は踏みならすし、ピーピーやるし、1メートル先の声が通らない有様でした。ひどいときにはコインが飛んできたり。

— **投げ銭ですか、ひどいですね。**

だからサインは「おにぎり」にしました。グーを出しながら「握った!」とか「おにぎりー!」と叫びながら、一人時間差はどんどん決まっていきました。これには後日談があります。その試合をブルガリア大使の山下重明ご夫妻が観



合宿風景 (1971)



日ソ戦 (1970)

戦していらして、翌日、松平さんに大量のおにぎりの差し入れが届いたのです。松平さんが驚いていたら、「きのう試合中に選手がしきりに『おにぎり』『おにぎり』と言っていたから、よっぽど食べたいんだろうと思った」と。

— **あはは、面白くもいい話ですね。**

## コンビネーション抜群の阿吽の呼吸

— **日体大を卒業後、日本鋼管に入社し、大古誠司選手とチームメイトになりましたね。三羽ガラスと言われた大古選手や松下電器に行った横田忠義選手とは同世代ですか。**

大古は早生まれですが、全員同学年でした。

— **そうでしたか。メキシコ大会では若手だったあなた方が、だんだんとチームの主力に成長していきました。3人の中で、あなたはよく“クール”と称されていましたね。**

ありましたね。大古は熱血漢で、非常にながむしゃらで脇目もふらずに突き進むタイプ。あれで、僕まで同じようにカッかしてしまうとまずいなという意識は常にありました。

— **なるほど、表面は冷静でいても、内心はやはり熱く燃えていたんだ。いいバランスとコンビネーションがとれていたのですね。**



ミュンヘンオリンピック、対ブラジル(1972)

そうですね。ミュンヘンのころのチームは、サーブレシーブは木村憲治さんと僕が担当していました。僕の隣に大古がいて、僕がサーブレシーブすると大古がクイックに入る、そして僕は時間差攻撃に回る。そういう戦法が暗黙の了解がありました。また大古がフォワードレフトにいてレシーブをして倒れていたら、僕はセンターからサイドにスーッと走り、平行トスをもらって打つとか、あのチームはいろいろなことができました。

—— 監督から言われるまでもなく、サインでもなく、全部、お互いの呼吸で？

はい。他にも、二段トス（サーブレシーブがセッターに入らず、セッター以外の選手がトスを上げる）のとき、アタッカーはブロックが見えません。だから「よし」と言ったら真ん中が空いているからフェイントを落とせ。言わなかったらフェイントはダメだぞとか。全部、選手が瞬間的な言葉で通じていて、猫さんも瞬時に理解して、みんな阿吽の呼吸ですんなり反応できるチームでした。

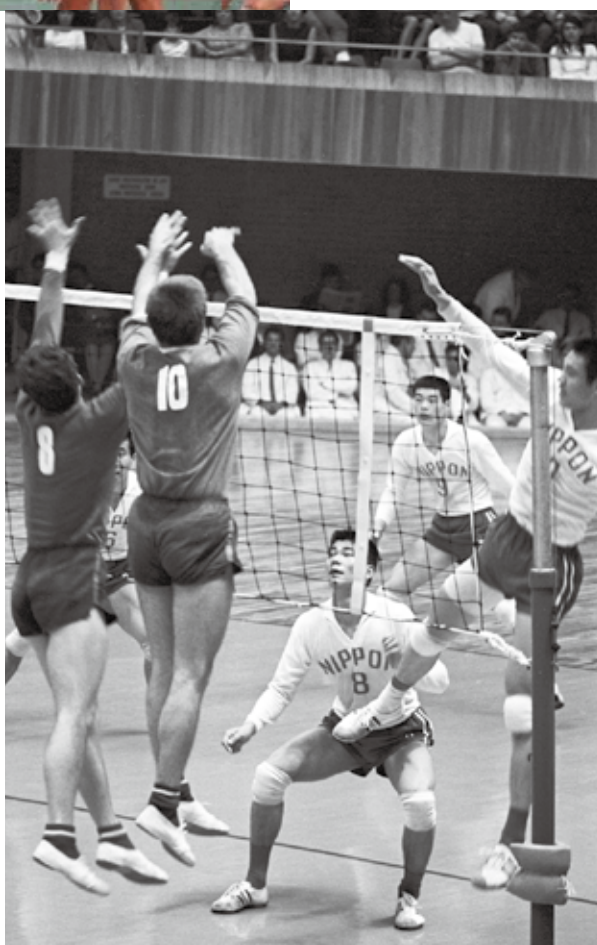
—— 練習のうちから意思の疎通が培われて、チームが熟成していったのでしょうか。NHKのすぐ隣でしたから、私はミュンヘン大会の前によく合宿の取材に行きました。そうしたらまあ、サーカスの練習かと思うような光景が繰り広げられていましたね。

トレーナーの斎藤勝さんがひものついた網にボールを入れて、グルグルとぶん回すのです。低く回されたときはももを上げて跳ぶ。次にボールが頭上を通過するのを待ち、また飛び上がり、次は腹ばいになってボールを頭上で通過させて、という連続技でした。

—— 日本バレーボール協会（JVA）の前田豊さんがあれを見て、「サーカスだってこんなことはやっていない」と言っておられましたよ。

## よもやの大苦戦、準決勝ブルガリア戦

—— 1972年8月に、いよいよミュンヘンオリンピック大会が開幕しました。初戦ルーマニア、第2戦キューバ、第3戦東ドイツ、第4戦ブラジル、第5戦西



メキシコオリンピック、対ソ連(大古、横田、森田)(1968)



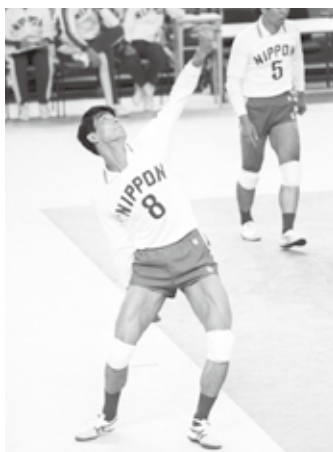
ミュンヘンオリンピック、対ブラジル(1972)

ドイツと、日本は全勝で予選のグループ B を抜けました。しかし準決勝のブルガリア戦、あれは苦勞したね。

あれはこちらの考えが甘かったですね。その年の4月、ブルガリアは来日して7試合対戦していたのです。日本はすべてストレート勝ちでしたが、彼らは日本のデータをしっかり持ち帰っていたわけですね。

- 相手エースのズラタノフとセッターのカーロフのコンビは、最高でしたよね。あの試合、日本は第1セット、リードしながら逆転されました。第2セットも中盤まで競り合ったのに自滅で落としてしまいました。

どうにもリズムが取れませんでした。相手のサーブが良いので、サーブレシーブが短くなり、大古、横田の大砲がポンポン打つしかない単調な攻撃になってしまったのです。



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)

## 気持ちがりセットできた 松平監督の言葉

第2セットも落としてチェンジコートになり、コートサイドをとぼとぼ歩きながら「まずい、まずい」とマイナス思考になっていたとき、松平さんは穏やかにこう言ったのです。「おまえたち、あと2時間このコートに立っておけよ、そうすれば勝てるから」って。

- 2時間ということは、第5セットまでやるということか……。それも、檄を飛ばすという感じではなかったのですね。

ええ、あの言葉でリセットすることができましたね。でも勝負の第3セットも、4-7とリードされ、そこで投入されたのがベテランの南さんでした。



ミュンヘンオリンピック、対ブラジル(1972) ミュンヘンオリンピック、現地練習(1972)

- 南将之の「南将」から、チーム内の愛称は「ナンショウ」でした。猫田さんがトスを上げながら「ナンショウ!」と呼んだら、ブロックにつこうとしていたブルガリアの選手まで「ナンショウ」と言っていた。それほど、読まれていたんですね。それでも南選手は一人時間差を決めたりと流れを変え、そのセットは15-9でようやく一矢報いました。第4セットも取り返して2-2のタイ。勝負の最終セットは、また死闘になりましたね。

4-8とリードされたところで、チェンジコートです。チェンジコート後、ブルガリアは勝ちを意識したのかプレーの内容がガラッと変わりました。僕たちは5-9から追い上げ、最後は嶋岡健治選手が決めて勝ちました。

- その瞬間、嶋岡選手はばたっとひっくり返り床をバンバンたたきながら喜び、他の選手はばーっと集まってという感動のシーンを思い出します。あの試合、私はラジオ中継をしていました。私はね、放送中にあまりエキサイトしないほうなのですが、あの試合だけは叫びましたね。でも思い返してみると、リードされていてもまだやれるという雰囲気があって、なぜか大丈夫だという気持ちで見えていました。



ミュンヘンオリンピック、松平監督 (1972)

## 東ドイツを破りついに 手にした金メダル

— 決勝戦は、想定していたソ連ではなく、ソ連を破った東ドイツが上がってきました。強敵とは見られていましたが、予選はストレートでスコアもワンサイドだったのですよね。でも決勝では、第1セットを落としました。

あれね、今でも何で落としたのかなと思うのですがね。

— でも第2セットを15-2で奪い返し、立て続けにセットを奪って優勝しました。

決勝戦としては物足りない試合になりましたね。

— 東洋の魔女が金メダルを取ったとき、表彰台に立ったのは、河西（現在・中村）昌枝キャプテン一人でした。でもミュンヘンでは、選手全員が一番高い表彰台に上がることができましたね。金メダルを手にしてどうでしたか。

ずしりと重みを感じました。自分は幸せ者だ、とも。

## 3人の恩師がいればこそ

— ミュンヘンのあと、全日本を離れた時期がありましたね。

「終わった」という安堵感がありました。そして常に、「なぜ、俺はこんなところにいるんだろう」という場違いに感じる気持ちもあって、そういう環境への疲れもありました。25歳で、これから仕事にも取り組みたいと思いましたし。

ですから、それ以降は全日本を辞退して日本鋼管だけで

頑張りました。丸5年全日本には行かず、1977年、日本で第2回W杯が開催されたときにまた復帰しました。1980年3月、32歳のときに現役を引退し、1991年からは日本体育大学バレー部の監督に就任しました。

— 松平さんは、2011年12月31日に逝去されましたが、あなたにとって松平さんという方は非常に大きな存在だったのでしょうか。

僕には松平さんを含めて、3人の恩師がいます。高校時代の原田智先生、日体大時代の中田茂先生、そして松平監督です。今、自分が指導者になっていること自体、松平さ



ミュンヘンオリンピック、優勝を決めて胴上げ (1972)



ミュンヘンオリンピック、松平監督 (1972)

んの影響が非常に大きかったと思っています。

— ミュンヘンの仲間では何か連絡を取り合っていることはありますか。

年に一度、「ミュンヘンの会」というのをやっています。つい最近その会があって、夫婦同伴で、松平さん、南さん、猫さんの奥さんもいらしゃいました。翌日、私は行けませんでした。皆さんで松平さんのお墓参りに行ったそうです。



## スポーツ基本法はまだ言葉が先行している

- **スポーツ基本法ができて、誰もがスポーツに親しめる機会を、という環境整備もうたわれています。バレーボールでは、以前から婦人バレーの普及度が高いですね。**

東洋の魔女が火付け役になりましたね。ママさんたちは体育館に子ども連れで来ますので、その子どもたちが大きくなって本格的にバレーを始めてという流れがありました。

- **私には二人息子がいて、嫁同士がバレーのチームメイトなのです。祖父である私が体育館の観覧席で4人の孫の面倒を見るわけです。では私も、バレーボールの普及に一役買っていたわけですね。**

そういうことですね。でも基本法を読んでみると、まだ言葉だけが先行しているという感じがぬぐえません。「10年」といいますが、10年先なんてまた状況が変わっていますよ。10年一昔といわれた時代から、今は5年一昔ですからね。

- **そう言えばあなたは、強い大学生が全日本男子バレーを支えていた時代、社会人が支えていた時代、それから混乱の時代、すべてを体験しているわけですね。**

はい、でも混乱の時代は今後は避けてもらいたいですね。

## 金の卵を発掘し育成する

- **JVAの仕事をするようになったのはいつごろからですか。**

45歳ぐらいからですね。松平さんが全盛のころでしたから、いろいろ指導を受けたり、また怒られたりもしました。

- **バレー界の将来についてどう考えていらっしゃいますか。**

担当者として、今までどおりでは当然ダメだと思っています

す。例えばミドルブロッカーというポジションでは世界のトップクラスと20センチほどの身長差があり、クイックですら真上から打たれてしまう。それを早急に何とかしようとしたら、極端に言えば、長身の外国人を帰化でもさせないと。



ミュンヘンオリンピック、対東独(1972)

- **しかし、日本では法的に難しい。**

そういうことですね。となれば、人材の発掘です。旧共産圏では、どこまで身長が伸びるか「長骨」から予測するといったことを行なってきました。でもその計算式は、日本人にはあてはまらないそうです。日本用の数式を確立させると同時に、家系的に大柄な人がいる人材をねらって強化していくということも始めています。発掘後の育成についても、例えばいま秋田県や宮城県に2メートル近い有望選手がいます。秋田の中学生はあまりバレーが盛んではない地域にいるので、月に1~2度、強化本部副本部長の川合俊一を派遣して、指導してもらっています。彼が高校に進学したら、今度は高校の先生に、「こういう強化をお願いします」と伝え、綿密にコミュニケーションを取っていくことが大切になります。

## 大学生なら 学生生活も大切に

- **日本体育大学教授という立場から、スポーツを通じた人間形成、文武両道などについて、ご自身の哲学といったものはありますか。**

オリンピックを目指す人間でも、指導者を目指す人間でも、やはり学生生活をきちんとやり通さないと、何事も中途半端で終わってしまうことになるでしょう。僕自身が日本鋼管から日体大に職換えしたこともあり、大学生を頑張らせないと日本の将来はないと考えています。しかし我々のころと比べると、大学は授業への出席、レポートの提出、試験による単位取得といった面で厳しくなっていて、

気の毒な面もありますね。少しでもスポーツと勉学の両立に近づくためには、周囲に理解者を持つことです。そのためにはふだんから学生としての生活も大事に過ごすことが、協力を得る一つの秘訣になると思います。また、学生の意識が甘いことも確かなのです。全日本入りはVリーグ入りしてからでいいじゃないかとか、一言で言えば楽をしてうまくなりたいといった緩い考え方の学生選手が多くなりましたね。それに加え、指導者の勉強不足も感じています。

— 指導者の強化にも手をつけるということですか。



日大鶴ヶ丘高校2年の時の大会(1964)

そうです。例えばユニバーシアードやジュニアのチームは大学担当者ではなく、JVAが専門の監督、コーチをつけて、年間を通じて強化していくシステムに変えていかないと。

— 準ナショナルチームということですね。見通しはどうか。

実はこれ、きょう初めて言葉にしたわけですが、筋書き、予算の工面も考えていますので、やれると思います。

## スポーツ界活性化のためにも2020年東京オリンピック招致の成功を

— 東京が招致活動をしている2020年夏季オリンピックについては、どうお考えですか。

何が何でも成功させなければいけません。これで失敗するようだと、今後、日本でのオリンピックはもうない、それぐ

らいの覚悟が必要でしょう。逆に言えば、招致に成功したら、その後、30～40年にわたり、日本のスポーツ界は活性化されることでしょう。ロンドンオリンピックを視察してきましたが、どこの会場に行っても、小さな子どもがユニオンジャック旗をマント代わりにして、「GB (Great Britain) ! GB !」と応援していました。2020年に日本でも同じ光景が展開されれば、その子どもたちが日本のスポーツ界を明るく照らしてくれると思います。

— 森田さんは2003年にバレーボール殿堂入りしていますね。殿堂なんていうと年配の名誉職というイメージがありましたが、あなたは実に澁刺としていて活動的ですね。

念願だった日本オリンピック委員会の理事にもなりました。自分の好きなことがやれていますので、忙しいけれども大変だと思ったことはなく、日々充実しています。

— そうですか、これからもがんがんやってください。



28年ぶりにメダル(銅)を獲得した女子バレーボールチーム(2012)

## バレーボールの歴史

- 1895  
明治28  
アメリカのYMCA体育指導者のW.G.モルガン氏がテニスをヒントに考案
- 1908  
明治41  
大森兵蔵が東京YMCAで日本に初めてバレーボールを紹介
- 1917  
大正6  
第3回極東大会(東京)のバレーボール競技に日本初参加
- 1921  
大正10  
全日本排球選手権を開始
- 1922  
大正11  
日本の実業団バレーボール第1号チーム誕生
- 1925  
大正14  
関東排球協会創設、関西排球協会創設
- 1927  
昭和2  
大日本排球協会創設、大日本体育協会に加盟
- 1930  
昭和5  
アメリカのポールジョンソン氏がビーチバレーボールを考案
- 1945 第二次世界大戦が終戦
- 1946  
昭和21  
日本排球協会設立、第1回近畿国体開催
- 1947  
昭和22  
国際バレーボール連盟(FIVB)が、14ヶ国の代表参加のもとパリで創設
- 日本バレーボール協会に改名
- 1947 森田淳悟氏、北海道に生まれる
- 1947 日本国憲法が施行
- 1949  
昭和24  
第1回バレーボール世界選手権(男子)がチェコスロバキアで開催
- 1950  
昭和25  
天皇杯・皇后杯が全日本9人制選手権大会に下賜
- 1950 朝鮮戦争が勃発
- 1951  
昭和26  
日本バレーボール協会が国際バレーボール連盟(FIVB)に加盟
- 1951 安全保障条約を締結
- 1952  
昭和27  
第1回バレーボール世界選手権(女子)がソビエトで開催
- 1955  
昭和30  
日本バレーボール協会として国際式バレーボール(6人制)ルールを正式導入
- 1955 日本の高度経済成長の開始
- 1960  
昭和35  
日本がバレーボール世界選手権に初参加
- 1964  
昭和39  
「東洋の魔女」と呼ばれた日本女子が東京五輪で金メダル獲得
- 東京五輪より、バレーボールが正式種目に
- 1964 東海道新幹線が開業
- 1967  
昭和42  
日本で初の女子世界選手権を開催、第1回日本リーグ開催
- 1968  
昭和43  
メキシコシティー五輪で日本男女とも銀メダル獲得
- 1968 森田淳悟氏、メキシコ五輪で銀メダル獲得
- 1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸
- 1972  
昭和47  
ミュンヘン五輪で松平康隆監督率いる日本男子が金メダル、女子が銀メダル獲得
- 1972 森田淳悟氏、ミュンヘン五輪で金メダル獲得
- 1973  
昭和48  
日本バレーボール協会、財団法人の設立認可を受ける
- 1973 オイルショックが始まる
- 1976  
昭和51  
山田重雄監督率いる女子がモントリオール五輪で金メダル獲得
- 1976 ロッキード事件が表面化
- 1977  
昭和52  
日本で初のワールドカップ開催
- 1978 日中平和友好条約を調印
- 1981 森田淳悟氏、日本体育大学の監督に就任
- 1982 東北、上越新幹線が開業
- 1984  
昭和59  
ロサンゼルス五輪で日本女子が銅メダル獲得
- 1984 香港が中国に返還される
- 1985  
昭和60  
松平康隆がアジアバレーボール連盟会長に就任
- 1987  
昭和62  
ビーチバレー男子全日本選手権である「第1回ビーチバレージャパン」開催
- 1990  
平成2  
ビーチバレー女子全日本選手権である「第1回ビーチバレージャパンレディース」開催

- 1994  
平成6 国内トップリーグのプロ化を年頭に、  
第1回Vリーグ開催  
**1995** 阪神・淡路大震災が発生
- 1996  
平成8 アトランタ五輪でビーチバレーが  
正式種目に採用
- 1999  
平成11 サーブ権がなくても得点の入る  
「ラリーポイント制」採用
- 2000  
平成12 シドニー五輪でビーチバレー  
高橋有紀子・佐伯美香ペアが4位入賞  
**2003** 森田淳悟氏バレーボール殿堂入りを果たす
- 2007  
平成19 全日本選手権の大会方式をJVAに登録されて  
いれば誰でも参加できる方式に一新
- 2008  
平成20 北京五輪大会出場  
(インドア男女、ビーチ男女含む全種目)  
**2008** リーマンショックが起こる
- 2010  
平成22 世界選手権で日本女子が32年ぶりの  
メダルとなる銅メダル獲得
- 2011  
平成23 ソフトバレーボールが小学校の教科に採用  
公益財団法人日本バレーボール協会設立
- 2012  
平成24 ロンドン五輪で女子バレーボールが  
28年ぶりに銅メダル獲得

# フォトギャラリー



小学5年。両親すぐ上の姉 (1958)



小学6年 (1959)



中学生。狛江自宅にて (1960~1962)



日大鶴ヶ丘高校2年の大会 (1964)



日大鶴ヶ丘高校時代 (左から3番目) (1963-65)



大学2年で選ばれたユニバー東京大会で優勝 (左から4番目) (1967)



メキシコオリンピック、対ソ連 (大古、横田、森田) (1968)



メキシコオリンピック、銀メダル表彰式 (1968)



メキシコオリンピック後首相官邸にて (右から4人目) (1968)



合宿風景 (1971)



合宿風景 (1971)



ミュンヘンオリンピック、対ブラジル (1972)



ミュンヘンオリンピック、対ブラジル (1972)

## 五輪を制した「一人時間差」 森田 淳悟



ミュンヘンオリンピック、松平監督 (1972)



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)



日ソ戦 (1970)



ミュンヘンオリンピック、対ルーマニア (1972)



ミュンヘンオリンピック (1972)



ミュンヘンオリンピック、サインをする森田 (1972)



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)



ミュンヘンオリンピック、対東独 (1972)



ミュンヘンオリンピック、優勝を決めて胸上げ (1972)



ミュンヘンオリンピック、日本チーム集合 (1972)



ミュンヘンオリンピック、祝勝会 (1972)



結婚式 (1972)



子どもと (1976~79頃)